

醍醐天皇事記 史料卅八 十一下

和書門		捐印	類	號	函	架	冊
三	九						
一	九						
四	九						

和史
三六號

內閣文庫			
和	書	類	號
三	九	〇	四
八	九	一	四
架	冊	函	冊
(四四才)			

內閣文庫	
番號	和 93
冊數	409 (44)
函號	141 131



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



史料卷之三十六

醍醐天皇御紀卷之二十一

九月六日

九月七日

九月一日

九月

九月

九月

史料卷之三十八

溫故堂文庫

和學講談所

醍醐天皇事記第十一下起延喜七年九月盡十二月

九月大乙亥朔

乙亥日食事

內閣文庫

按又見日本紀略記裏書云九月一日乙亥日食廢務

按又見日本紀略

九日癸未重陽宴事

日本紀略云九月九日癸未重陽宴題云親

奏_二霓裳羽衣_一勒_二六韵_一七言

北山抄九日節會條云大臣仰云獻題博士

等跪大臣後書之

承和以往三獻以前獻之天安以後三獻以後令獻

延喜七年復舊未供御膳之前獻之依是儀式文也

十日甲申法皇遊覽大堰川事

日本紀略云十日甲申法皇召文人賦眺望

九詠之詩某日天皇幸大堰川

按據下所引諸書此日法

皇幸大堰川使陪從人賦詩歌而本書以為天皇特幸大堰川非也

古今著聞集云高平院時昌泰元年九月廿一日

大井川小舟幸有て紀實之私云云假名序

かきりあてまじわの君乃代るの月はあはれのこと

昨よりあて乃と流る菊ささきよりあはれささき

秋を別と流るえとささき月はあはれのことささき

梅はあはれささきささきささきささきささき

夕月秋小倉たこのほらささきささき大井乃

川邊小舟幸一あはれささきささきささき

のころ今成りしにうへて好の事か成りし
人あはれきく好くらりかへしとみればさし
ふれんやうとやこの好なれ年記英か仙も乃
事かす抄はけのりしと海のに記さしと
抄按本書既為昌泰元年而又自疑之
則不足以為據今據序文并紀略新
拾遺集等
引于此
古今集目錄躬恒下云延喜四年大井行幸
和歌署所注散位凡河内躬恒件日題九讀

人六人每題各一首但躬恒除鶴洲立之外
每題獻二首奥又副一首云二按躬恒以上
延喜作延長可後件日以下乃此
見拾芥抄而
日之事也本書合為一事誤也
古今集之法宮に川よむりもたぬか
日けりよとりのあそりとし事致題もあそ
法に事致題にのり乃をそ川を以凡ふ
よそあ海地深かきり見致
又法宮よりつるふなり海への奈

此後日々於山乃のひりけりて海に
懸るる海を渡る業家つて思ひに
すふふ知る是引たふのいあふふ
亦やいれ也
續古今集之亭子院に
海一ありけふ日江村老とて
思付け於糸議伊衡に
吾のふふあふ相あふふ
吾のふふあふ相あふふ

廿八の四

くやまか

新拾遺集之延喜七年
乃のあは秋水とてふ
うをて地何いゆ
とや

續後拾遺集之亭子院
乃のあは秋水とてふ
坂上是則於乃の色

誰のとうくはくしりく

新子載集々亭子院西川はたり

ありは日鶴立例とては

とほとほめおに坂上是別とて

とほとほの鶴のたては川邊を人

頼基朝臣集々大井川のちき

の影とよほせありふめい

ゆつとえふれを旅の居る

写つたふかりおもめる

とほとほめおに坂上是別とて

忠岑集々紅葉おつ大井の幸

ねらつては日鶴立例とては

葉大井の幸おつ大井の幸

とほとほめおに坂上是別とて

止是今抄一二首
以備九題之數

和漢朗詠集猿人烟一穗秋村僻猿叫三聲

按以上家
集所収不

曉峽深秋山閑望

紀納言

新撰朗詠集猿峽裏猿鳴悲又清况聞薄暮

第三聲猿叫峽

善家

十一日乙酉例幣事

日本紀略云十一日乙酉伊勢奉幣天皇御

八省依無納言參議有實給宣命

西宮記裏書云延喜七年九月十一日天皇

幸八省有大神宮例幣事依納言已上不參

令參議藤原有穗朝臣行事

按有穗當作有實

又云延喜七年九月十一日御記云無納言

以上行幸及行事例有

文闕

而左時平大臣令奏云

有穢無納言兼合御物忌雖不御八省有何

事又宣命式云參議已上得行者行之無妨

只祢宜位記無捺印者載宣命後日可追給

云二仰宣命事令參議等行只出八省事行

程無幾諸衛供奉如例至于無納言有何闕

乎午一刻御八省拜伊勢幣如常參議有實

朝臣令給宣命訖還宮按又見小野宮年中行事

撰集秘記云延喜七年九月十一日御記抄

云左大臣令申左近將監或假或勘事無可

供大刀契者先例無將監者以將曹令供奉

仰依例者

類聚大補任首書云延喜七年卯丁九月十三

日丁卯左大臣以下神祇少副率就政伊勢大

神宮祢宜荒木田莖貞授從五位下即以神

祇大史春雄奉遣彼宮

十五日己丑外宮遷宮事

大神宮例文云延喜七年卯丁外宮遷宮醍醐天皇

御自內宮遷宮隔中一年

十七日辛卯伊勢大神宮禰宜莖貞等上譜圖帳

事

皇字沙汰文云伊勢天照皇太神宮祢宜譜

圖帳皇太神乃天磐門閉給天隱坐時仁高
天原閣天八百萬神達愁祈于時天兒屋
根命夢悟天偈天香山立流弥津加之木枝
乎曳折天一夜列座神乃事尔隨者八百万
神達天安河原尔神集集給天件木枝乎曳
折天各刺立支之中國摩大鹿島命二男大
狹山命兒天見通命刺生此時弥津加之木
上枝尔天拔門加作流八尺鏡懸介中枝尔
波

天明玉加作流八尺曲玉懸介下枝尔天乃
香豆比女加作留真蕚乃木綿著氏荒木田
神主等加遠祖天見通命木綿葛乎為繼懸
氏令捧持忌部遠祖太玉串命種二幣帛捧
天天石門前跪坐天天手力男命天石門乃
左方居右方天乃於須女居天常世國永鳴
鳥儲天日影葛乎諸命為縵天大中臣遠祖
天兒屋根命神祝詞申止之良无流尔安哉

之加利給天天石門乎開坐支于時奉始真
坂木介木綿著天号玉串供奉神世祢宜天
見通命大狹山命子也兒天布多田岐命此
命纏向珠城宮御宇天皇御世祢宜自餘右
依神祇官仰事祢宜不絕供奉譜圖帳勘造
進上如件以解延喜七年九月十七日大内
人正六位上荒木田神主塋安前祢宜從五
位下荒木田神主德雄今祢宜從五位下荒

卅八之九

木田神主塋貞

三十日甲辰法皇賦詩事

日本紀略云世日法皇賦遊殘菊花下詩下

十月小乙巳朔

二日丙午授紀伊國熊野早玉神等位階事

日本紀略云十月二日授紀伊國正二位熊

野早玉神從一位又從二位熊野坐神正二

位按長寬勘文同之

御幸熊野事

仁和寺傳云延喜七年十月二日丙午御幸熊

野山按日本紀略熊野山御幸次第為三日今據西宮記裏書扶桑略記從本書

濫觴抄云院熊野御參詣醍醐十年丁卯延喜

七月二日法皇參御廿八日還御

西宮記裏書云延喜七年十月一日使道明

仰左大臣時平曰仁和寺宇多可御紀伊國若可有所

申否大臣令申云勘前例清和太上天皇御

平城時能有朝臣等引宿衛奉從又前時法

皇行幸時友于朝臣奉從今以為奉遣參議

少將等可善抑明日參入可定仰二日使仲

平朝臣奉問途中云二

扶桑略記云十月二日丙午仁和寺太上法

皇幸紀伊國參御熊野山勅使右近中将仲

平朝臣奉問途中為令奉從法皇御幸差使

召參議昇朝臣三日丁未昇朝臣令奏昨日

途中被馬踏足上腫不得參入勅宜仰仲平
朝臣可令_レ往候法皇御行焉以穀倉院綿三
百屯調布二百端奉_レ充法皇幸紀伊國途中
百練抄云寬和二年十月三日圓融院去月
廿九日參詣石山今日自石山以船臨幸崇
福寺御打出濱之間右少將齊信為勅使參
入有送物延喜御宇亭子院臨幸紀伊國之
間引清和例被奉送了

又云寬治四年正月廿二日上皇參詣熊野
山參議保實為勅使問旅窓延喜例云二

九日癸丑鷺集承明門事

扶桑略記云九日癸丑鷺集承明門上
十日甲寅信濃權守清蔭任大藏卿事

公卿補任尻付云源清蔭延永三正七從四
上同七正十三信濃權守十月十日大藏卿

十三日丁巳定勘徵京戶口分田地子例事

政事要略應和三年下五畿內諸國官符云
應依左京職移文勘會祖帳京戶口分田事
右得彼職去年二月廿一日解備謹檢案內
管戶計帳不進口分田依格職寫其帳下宣
旨差職使勘納地子國依件免除祖帳而年
來畿內國司或減本僅故下符或及未許使
入部內、據无程職納實之謹案太政官去
延喜七年十月十三日符備以幹事國司一

人專當其事與郡司共臨田畔定荒熟職使
共令勘徵地子若蔑爾符旨不勤遵行注其
由言上隨將科決者云二
全文在應和
三年六月
十七日辛酉
右近中將仲平奏熊野御幸間消息
事

扶桑略記云十七日辛酉及夜仲平朝臣自
紀伊國來復命法皇以去十一日自切尾湊
御舟赴向熊野神社其日為報道中消息有

仰令還來但傳聞進御道中泛海傍山其路
甚難云二

從三位列子薨事

日本紀略云十七日從三位宮道朝臣列子
十薨帝之外祖母也有薨奏

扶桑略記裏書云十七日辛酉從三位宮道
列子薨是帝之外祖母故内大臣^{高藤}之室家也
世德物語云今昔宗法の如くをばしと人

乃湯子内舍人... 人... 好... 九月... 申... 大... 人...

しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほの君の
方も人のあつたふもほ馬をさす〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
うちにふも馬を引く〜〜〜しほのまゝのいふに
板敷にさす〜〜〜しほのまゝのいふにさす
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
日もさす〜〜〜しほのまゝのいふにさす
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ

しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ
しほのまゝのいふにふまゝにさし〜〜〜しほ

事也我公の事もさきく存はあつたなりとこの後の
ついでに一語をいふは是れも御心をいかに
おぼしめしおぼしめしおぼしめしおぼしめし
成程とていふ人々の心もさきく存はあつたなり
尋ねていふはさきく存はあつたなりとこの後の
中におかしくいふはさきく存はあつたなりとこの後の
こと人々の心もさきく存はあつたなりとこの後の

二六二

さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の
さきく存はあつたなりとこの後の



入多しとある下よりなりなるなりわたり
 のものなり
 入多しとある下よりなりなるなりわたり
 のものなり

廿二日

好人のあつた海よりなるなりわたり
 のものなり
 好人のあつた海よりなるなりわたり
 のものなり

右馬頭定文卒事

在山城國宇治郡小野郷

延喜諸陵式云後小野墓贈正一位宮道氏

按刑部當
作宮内

（Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page, including characters like 延喜, 諸陵, 式, 云, 後, 小野, 墓, 贈, 正, 一位, 宮, 道, 氏, 在山, 城, 國, 宇, 治, 郡, 小, 野, 郷）

扶桑略記裏書云右馬頭從四位下藤定文
卒去是帝之外舅也

尊卑分脈藤原高藤一男定文從四下右馬

頭母大江乙平女

十八日 壬戌御祈熊野御幸平安事

西宮記裏書云十八日拜伊勢賀茂上下松

尾石清水春日平野住吉日前等神祈法皇

道中平安由

廿五

召勘河内守安世王事

又云召河内守安世王於藏人所令管根朝
臣勘太上法皇還御之間供奉闕怠之狀

廿六日庚午故後三位列子贈位事

日本紀略云廿六日庚午詔贈從三位宮道

列子正二位殊賜綃布等按二位疑一位之誤

著御錫紵事

又云天皇服錫紵

卅八之廿三

百練抄云永久二年二月廿九日於院殿上

被定主上外祖母薨逝事實季卿室去廿四日薨任延

喜七年天喜元年例錫紵可被行廢朝之由

諸卿定申了

廿八日壬申法皇還御事

扶桑略記云廿八日壬申左近少將副自仁

和寺還來復命法皇仰云以只今時自紀伊

國還云二

十一月大 甲戌朔

一日 甲戌 旬事

西宮記云行幸日少納言遲參之時有勅以

堪事少將令奉仕鈴奏 延喜年中右近少將藤原忠房是其近例

延喜七年十一月一日以少將為少納言代令唱見參云二允少納言遲參之時以少將

多為代官其例見代二記

三日 丙子 鑄延喜通寶錢事

日本紀略云十一月三日詔改寬平大寶錢

卅八之廿四

貨為延喜通寶一以當舊之十新與舊並令

通用之

拾芥抄云延喜通寶 延喜七年十一月三日 件錢自今

年至天德元年經世四年 按世四年當作五十二年

十三日 丙戌 定諸國別納租穀數事

政事要略延喜十一年官符云檢案內別納

租穀之數去延喜七年十一月十三日每國

立限云二 全文在十一年二月

又云民部式云年料別納租穀伊賀國二千斛
 伊勢國四千五百石駿河國三千五百斛伊豆國一千五百
 斛甲斐國三千五百斛相摸國一千五百斛武藏國
 一万二上總國四千六百下總國一万四千常
 千斛陸國一万一千斛信濃國一万一千斛上野國一万七
 下野國一万一千石能登國四千石越中國四千石越
 後國七千石丹後國九百石但馬國二千石因幡國
 二千五百伯耆國四千六百出雲國四千五百石
 百斛

廿八之廿五

見國二千五百石長門國二千廿七石紀伊國三千二百石
 淡路國一千六百石右廿五箇國各別納租穀内
 隨官符到充位祿季祿衣服等料依延喜七
 年十一月十三日官符如是

十八日辛卯穢中行新嘗祭事

政事要略云内裏有穢行新嘗會例元慶七
 年昌泰二年延喜元三七

廿二日乙未敦實親王元服并叙三品事

扶桑略記云十一月廿二日乙未敦實親王
今日於宇多院加元服之由今奏慶賀則於
東庭舞蹈更召殿上給酒一二度後殊叙三
品親王寬平第八皇子則下殿拜舞又召給
祿又下拜舞退出按本書裏書為廿三日
日據西宮記裏書本書為是

西宮記裏書云延喜七年十一月廿二日御
記云敦實親王加元服參入殊叙三品自書
給之

卅八之廿六

親王拜舞云二同廿三日左大臣時平令奏位記
可作狀廿五日位記請印付右少弁清貫給
親王

廿四日酌賀茂臨時祭依列子薨延引事
日本紀略云廿四日停賀茂臨時祭依列子
事也

廿八日辛丑賀茂臨時祭事
北山抄賀茂臨時祭條云延喜七年下酉有

穢同月丑日被行云二

三十日癸卯日食事

日本紀略云世日日有食之

十二月小甲辰朔

五日戊申伊勢臨時奉幣事

北山抄云伊勢太神宮告即位由事駕腰輿

幸建禮門安和二年御八省臨時或御建禮

門延喜七年十二月五日云二

卅八之廿七

十三日丙辰依皇太夫人遺令不入國忌荷前事

類聚符宣抄云先中官皇太夫人藤原氏左

大臣宣奉勅件宮宜依遺令勿奉入國忌荷

前者延喜七年十二月十三日大外記阿刀

宿祢春正奉

十六日己未旬事

日本紀略云十二月十六日己未旬天皇御

南殿

西宮記旬條裏書云延喜七年十二月十六

日御南殿掌侍時子臨東檻召大臣前例出御南殿

時內侍召公卿而五六年來自內受氣云二色參上此日左大臣令奏先例故行之

此日障子為修治撤却仍施屏風供奉裝束

也

廿一日甲子荷前事

西宮記荷前條裏書云延喜七十二廿一有

十犬死而御出建禮門按又見江家次第

政事要略云西宮記荷前事延喜七十二廿

一內藏寮有犬死其穢入內裏而猶有行幸

北山抄荷前條云延喜七年雖有內裏穢依

例猶有行幸按年中行事抄同之

除贈太政大臣長良荷前加贈正一位列子事

西宮記裏書云延喜七年十二月二十一日

止長良墓以宮道列子預荷前事

又云延喜七十二廿五依左大臣申止長良

墓以宮道列子預荷前按五宜作一

中納言有穗薨事

日本紀略云廿一日中納言藤原朝臣有穗

薨年七十一按尊卑分脉為廿二日一代要記為五月廿二日公卿補任為

此日又按補任為年七十分脉為七十二要記同本書

公卿補任云藤有穗備前守從五位上直道

一男母陰陽助繼雄女貞觀十一三四任主

藏正十二正廿五任讚岐權掾十六正十五

廿八之廿九

任春宮少進十八十二廿七任內藏權助十元

九正三叙從五下元慶元四十九聽禁色藏人

十月十八日任侍從二十五任右衛門權佐

八二廿三叙從五上三月九日兼備前權介

同十一日聽禁色衣服十一月廿五日叙正

五下九正十六兼左少將佐如元仁和二二仁和元

廿一兼右中辨去右衛門權佐餘官如元同

年八月補藏人頭左中弁左中三正七叙從將正五下也

四下同十一日任中宮大夫八月日止頭光孝天皇
昇霞閏十一月日宣旨聽雜袍寬平三十四十一
兼任右大弁四三十四叙後四上五二十六
任參議大夫如元止大弁以上六年正月十
五日兼阿波守七年正月十一日兼備前守
九年五月廿五日兼治部卿中宮大夫如元
十二月廿三日叙正四位下昌泰三年十二
月五日兼備前權守延喜二年正月廿六日

卅八之卅九

任中納言叙從三位二月廿三日兼民部卿
六年九月十七日兼春宮大夫七年十二月
廿一日薨七十
官職秘抄云檢非違使佐兼侍從例有穗
三代實錄云元慶二年二月十五日辛巳侍
從從五位下藤原朝臣有穗為右衛門權佐
八年二月廿三日甲寅授散位從五位下藤
原朝臣豐雄右衛門權佐藤原朝臣有穗並

從五位上三月九日庚午散位從五位上源
朝臣加為備前權守右衛門權佐從五位上
藤原朝臣有穗為權介本官如故
類聚國史云元慶八年十一月廿五日壬午
授從五位上安倍朝臣興行右衛門權佐兼
備前權介藤原朝臣有穗並正五位下
三代實錄云仁和元年正月十六日壬申正
五位下行右衛門權佐兼備前權介藤原朝

臣有穗為左近衛少將備前權介如故二年
二月廿一日辛未左近衛少將正五位下兼
行備前權介藤原朝臣有穗為右中弁餘官
如故六月十九日丁卯左近衛少將正五位
下兼守右中弁行備前權介藤原朝臣有穗
為左中弁近衛少將備前權介如故三年正
月七日辛巳授民部大輔正五位下藤原朝
臣忠主左近衛少將兼守左中弁藤原朝臣

有穗並從四位下

扶桑略記云仁和三年八月二十八日己巳

太政大臣奉勅令左大弁橘廣相左中弁藤

有穗左近衛權中將藤時平左兵衛佐藤高

經等待殿上

綏子內親王為陽成院四十御賀營佛像經王

事

日本紀略云同日釣殿宮內親王奉賀陽成

廿八之廿二

院四十御算營佛像經王等

皇胤紹運錄光孝皇女綏子內親王號釣殿

宮配陽成院

廿九日_{壬申}追儻事

日本紀略云廿九日追儻

西宮記裏書云延喜七年十二月二十九日

大舍人廣高有病不供奉馬九仍以京職所

進高田夏吉為之其高不異卒人云二

又云延喜八年十二月二十九日仰大臣去
年晦夜處二或不追儻人二云今年京中愁
咳此依不儻疫鬼云二

是年左大臣時平等上延喜格事

帝王編年記云延喜七年左大臣正二位兼

行左近衛大將藤原朝臣時平等奉勅撰延喜

格十二卷聖主降其綸言賢臣施其筆削

按日

本紀略為元年八月誤也

卅八之卅三

類聚三代格延喜格序左大臣正二位兼行
左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉勅撰易
曰天垂象聖人則之又曰大人者與天地合
其德乃知陰陽寒溫天道所以成歲政令寬
猛人君所以導民隨時立教或革或沿觀風
制法世輕世重然則金科玉條不可用之於
厖厚之俗草纓艾鞞不能施之於僿野之人
若不達變通之道則何辨理亂之方者乎我

朝家道出混沌境同華胥無為之功未假号
令不言之化豈用章條於是朴往彫來步盡
驟至前帝後王雖俱存一面之網重規疊矩
不能廢三章之科故教而不誅制甲令於先
誅而不怒張丙律於後迨者弘仁格十卷貞
觀格十二卷亦是聖主降其綸言賢臣施其
筆削搜舊章於臺閣擇新制於詔命察此民
情適彼俗化垂納軌之弘典立經國之大規

方今膺千年之期運承百王之澆漓時風加
而茂草靡震雷動而蟄虫驚將欲禁溢浪以
隄防馭震駕以轡策流淳化於比屋之封反
薄弊於大庭之俗而制格以來歷年漸久或
數代之中弛張屢變或一事之上抑揚遞殊
或同本而異末或分源而會流斯乃雖協其
時宜匪故相反而綜其事迹無所適從爰詔
左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝

臣時平故從三位守大納言兼右近衛大將
行春宮大夫陸奧出羽按察使臣藤原朝臣
定國中納言從三位兼行民部卿春宮大夫
臣藤原朝臣有穗參議正四位下行左兵衛
督臣平朝臣惟範參議左大弁從四位上兼
行讚岐守臣紀朝臣長谷雄從四位上行式
部大輔兼侍從春宮亮備前守臣藤原朝臣
菅根左京大夫從四位下臣藤原朝臣興範

從四位下行文章博士兼備中權守臣三善
朝臣清行從四位下行民部大輔臣大藏朝
臣善行正五位下守右中弁兼行勘解由次
官臣藤原朝臣道明從五位下行大內記兼
周防權介臣三統宿禰理平外從五位下守
大判事兼行明法博士備後權介臣惟宗朝
臣善經正六位上按上疑守右大史臣善道
下之誤朝臣有行正六位上行兵部少錄臣弘世連

諸統等憲章前條綜緝此典起自貞觀十一年至于延喜七年其間詔勅官符搜抄撰集除其滋章刪其煩雜若祖述先格事有增損者據而無遺若弛張恒規理無補益者廢而不採以官分隸以類相從皆目舊目無加新意又其條貫糅錯難為區分者准之雜令便号雜格勒為十卷曰延喜格又有理非大典政出權時雖不足為龍鼎之銘而猶可恨雜

助之弃如此之類別為延喜臨時格二卷合為十有二卷依歲紀而取象法星次而分篇變由前摸不敢殊製臣等專存温故之意頗立改弊之文新舊分條縱有吹万之響先後同法庶成畫一之觀但冲旨既邈愚管難覃招嗤同周鼠之珎懷慙類遼豕之獻謹序

見本朝
文粹

東寺三長者始為結緣灌頂阿闍梨事

東寶記云大師略傳云坤角建灌頂院一區
准青龍寺之風勤修每年二季結緣灌頂先
師和尚付屬之健陀穀子袈裟并念珠等永
以施入件阿闍梨代二長者相續可勤修一
人若有障者第二人可勤仕不及三者文私
云此會大阿闍梨一長者病妨等時以次人
可請用之旨高祖遺告也仍加任長者多以
行之但如略傳者不及三者云二然者中古

以來三四長者勤仕非例歟延喜七年觀賢
律師參勤此時第三長者也是初例也

京師人好用焦色事

政事要略善相公奏狀云天安以往男女貴
賤衣袴皆染以支子貞觀以來改以深紅之
色當時号之曰火色轉相放、漸似緹練亦
号之曰焦色至于仁和禁制此色勅檢非違
使者督等罪其着用者而延喜七八年以後

京師盛好此服朝廷雖施禁令更亦舒緩

...

...

...

...

...

...



史料卷之三十八 源行之書

卅八之卅八

